カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

「旅の始まり150周年」記念行事

― 浦上四番崩れを受けて―

浦上四番崩れで捕らえられた浦上のキリシタンたちが6教区（名古屋・京都・大阪・広島・高松・鹿児島）22カ所に流配されて今年で150年を迎える。この流配を「旅」と称してすべてを受け入れたキリシタンたちの遺徳を偲ぶために、長崎教区と中地区、浦上教会の代表者が集まり話し合いを重ねている。また、流配先教区との連絡会も始まった。

5月2日に山口県湯田で行われた「浦上四番崩れ流配地連絡会」

7月、浦上教会で記念式典

「旅の始まり150周年」の記念式典は、流配が始まったとされる7月20日に近い7月22日（日）12時30分から浦上教会で開催される。テーマは、「先祖が流配で示した強い信仰に倣いそして子孫に伝えよう」。

第一部は、流配先の方々を交えてのシンポジウム。何処に何があり、どのように顕彰されているかなどを分かち合い、思いを共有する。第二部では旅にまつわる玄義によるロザリオの祈り。この祈りは中地区司祭団の呼びかけに応えるもので、浦上教会の歴史委員会が中心となって準備。旅に関する歴史的事実を祈りとして後世に残すだけでなく、祈りながら歴史を学ぶことができるロザリオの玄義となっている。第三部は髙見三明大司教司式による記念のミサを行い、続いて流配先の方々との交流会を予定している。

広島で流配地連絡会

流配先の教区もこの記念の年を迎え様々な行事を計画。流配地22カ所のうち7カ所を占める広島教区では、流配開始から帰還までを想起するために、2018年から2023年までを「浦上キリシタン流配150年」という名称のもと5年間かけて記念し、殉教者の顕彰活動を行うことにしている。

津和野・乙女峠まつりの前日5月2日（水）には、広島教区主催で「浦上四番崩れ流配地連絡会」が山口県湯田で行われた。

この会は、教区活動の一環として長崎大司教区および関係する流配先の各司教区と連携し、浦上四番崩れに続いて起こった流配によって迫害を受け、日本の近代国家に「信教の自由」をもたらす影響力となった、明治初期の証し人たちの遺徳をよりよく顕彰していくことを目的とする。長崎・浦上教会の主任司祭と2信徒を含め30人余が参加したこの連絡会では、白浜 満司教による趣旨説明、各流配地からの報告、津和野の殉教者列福についての意見交換などが行われた。

会の最後には、広島教区が進めている津和野の殉教者たちの列福・列聖運動に賛同し、今後、同教区が中心となって連絡会を続けていくことが確認された。

前田大司教 枢機卿に

教皇フランシスコは5月20日（日）正午、6月29日の枢機卿会議において14人の枢機卿を親任することを発表した。このうち日本からは、大阪教区の前田万葉大司教が選ばれた。日本人の枢機卿としては、故濱尾文郎枢機卿に次いで6人目となる。

乙女峠まつりに参加して

信徒発見のマリア像と共に

5月3日（木）朝5時、乙女峠の殉教祭に参加するため総勢53人を乗せたバスは津和野へ向けて浦上教会を出発。今年は「旅」の始まり150周年の節目の年、その関係もあり長崎の大浦天主堂で奇跡ともいえる信徒発見の一部始終を見守った「信徒発見のマリア像」（複製）が参加することとなりました。

10時30分、五月晴れの中、白いベールを身に着けた女子中高校生が担ぐ「津和野教会の聖母像」と「信徒発見のマリア像」を先頭に聖母行列が津和野教会をスタート、乙女峠までの約2㎞の道のりをロザリオの祈りを唱えながら歩きました（写真）。乙女峠では、全国から約1500人の信徒が参加し、「浦上四番崩れ」で津和野に配流された殉教者たちを追悼するミサが、広島司教区・白浜 満司教様の主司式で捧げられました。

ミサの中で津和野教会の山根敏身主任神父様は「長崎において聖母マリアのご加護にて潜伏キリシタンが発見され、津和野では安太郎にマリア様が現れ慰めてくださった。私たちの信仰の道において聖母マリア様が支え、励ましてくださることを信じて、共に助け合い一緒に信仰の道を力強く歩んでいきましょう」と話されました。ミサ終了後、十字架の道行きを唱えながら殉教者の墓「蕪坂墓碑」まで歩き、生花を供えて先祖を偲んで帰路につきました。

この殉教祭が毎年5月3日の憲法記念日に開催されるようになったのは、〝信教の自由の大切さを忘れないように〟との意向からです。私たちがマリア様からの豊かな恵みに感謝し、先祖に倣い信仰を深め、次の世代へ伝えるためにも、この巡礼の旅を今後も続けることが大切であると思います。

浦上教会 歴史委員会
中ノ瀬 孝

連載企画（全5回）

浦上村総流配〈旅〉の150周年 ― 第3回

純心聖母会　片岡千鶴子

〈旅〉の記憶の継承

三、守山甚三郎翁と
永井隆博士

㈠『乙女峠』の執筆

『乙女峠』は、永井博士の最後の本です。乙女峠とは津和野の山あいの峠の名で、浦上キリシタンの牢になった光琳寺があったところです。1951年その寺址に記念聖堂ができることを知った博士は、「甚三郎さんのことを書いておきたい」と容体が悪化する中、力をふり絞るようにして書き終えて、『乙女峠』と題しました。津和野に流された浦上キリシタンの信仰の物語です。脱稿から10日後の5月1日、博士は逝去します。

守山甚三郎翁
（長崎純心大学博物館蔵）

㈡甚三郎翁と永井隆の出会い

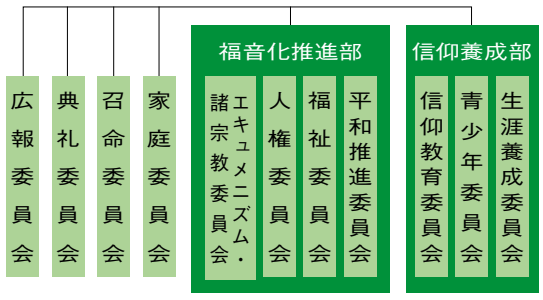
長崎医科大学生永井隆が下宿を浦上中野の森山家に定めたのは1931年でした。下宿から100メートルほどの高い石垣の上に守山甚三郎翁の屋敷がありました。引っ越した年にはまだ甚三郎翁は健在でしたが、翌年6月に翁は87歳で逝去しました。「甚三郎さんは、何回か見かけたことがありましたが…」「これが信仰の勇者とは気がつかぬほど平凡な、へりくだった農夫でした」と、永井博士はのちに記しますが、引っ越したばかりの医学生は甚三郎のことを知る由もなく、言葉を交わすこともなかったようです。それは永井隆の悔いとなりました。3年後、初めて浦上天主堂を訪れた永井隆を温かく迎え、洗礼を授けたのは甚三郎翁の長男守山松三郎神父でした。このような縁があって、甚三郎翁のことを書き残したいという思いは早くから永井博士の心にあったのだと思います。

1952年9月15日初版、53年5月25日再版の『乙女峠』（長崎純心大学カトリック文庫蔵）

㈢津和野の迫害

『乙女峠』は「四番崩れ」から書き出していますが、三分の二は津和野の牢の迫害です。津和野に流されたのは仙右衛門、甚三郎をはじめ浦上の「切れ者」28名とその家族たちでした。甚三郎の父国太郎、姉マツと弟祐次郎もいました。役人たちは相手はたかが百姓、説得すれば簡単に改心すると思いきや、甚三郎や仙右衛門たちは堂々と論陣を張って譲りません。ならば力ずくでと氷の池に投げ込んだり、三尺牢に閉じ込めたり、寒中に路地に裸で晒したりと数々の拷問によって改心を迫ることになりました。ついに甚三郎の父国太郎、弟祐次郎を含む36名が拷問に屈せず命を捧げました。永井隆を洗礼に導いたのは、この浦上キリシタンの信仰でした。『乙女峠』は、永井隆の信仰宣言であったのではないかと思っています。

長崎教区 諸活動部門 第6期（2018～2020年度）始まる



教区諸活動部門が第6期を迎え、部長・委員長が4月26日付で任命された。

信仰養成部…部長　中濱敬司
生涯養成委員会　谷脇誠一郎／青少年委員会　山口竜太郎（新）／信仰教育委員会　大山 繁
福音化推進部…部長　紙﨑新一
平和推進委員会　岩村知彦／福祉委員会　大瀬良直人（新）／人権委員会　尾髙修一（新）／エキュメニズム・諸宗教委員会　橋本 勲
家庭委員会…中濱敬司　召命委員会…岡 秋美　典礼委員会…下山盛朗
広報委員会…山田良秋

教区評議会総会

長崎大司教区教区評議会（会長・髙見三明大司教）は5月3日（木）、2018年度総会をカトリックセンターで開催した。総会では、前年度の活動・決算、本年度の活動計画・予算案を審議し、承認。また、聖フランシスコ病院の長崎教区への移管に関する協議の経過報告と、それに伴う質疑応答が行われた。今後は、移管後の経営に関する指摘を踏まえて協議を深め、結論を出すこととなる。

終わりに髙見大司教があいさつし、4月1日に開館した『大浦天主堂キリシタン博物館』の開館の意義を、いわゆる「旅の始まり」と関連づけて説明した。さらに、大神学院が来年度から長崎教会管区の諸教区立として再スタートする見通しであることを説明し、司祭召命のための祈りと働きかけを呼びかけた。

人事異動・任命

本紙4月号の「人事異動・任命」に左記を追加。

▼教区〔4月15日付〕
葛島　輝義師　中町協力司祭　（中町助任）

（　）内は前任地

ほしかげ

一般的に「階級制度」と理解されるヒエラルキーという語が、今日あまり好意的に受け止められることはないが、本来それは、特権や服従などを想起させるものではない▼語源となるギリシャ語のἱερᾶρχα（ヒエラルキア）は ἱερός（ヒエロス）と ἄρχω（アルケー）から成り、「祭司的原理」と理解される。ここで注意したいのは、ἱερός（ヒエロス）という形容詞である。ἱερός（ヒエロス）は ἅγιος（ハギオス）と同じように「聖なる」という意味に理解されうるが、ἅγιος（ハギオス）は絶対者である神のタイトルとしてふさわしく用いられるものの、ἱερός（ヒエロス）は神ご自身を形容するものではなく、むしろ神と人とを仲介する祭司・祭儀について用いられる。したがって、ヒエラルキーという語は本来、「仲介者たちの原理」と理解されるべき語であり、しかもそれは神との一致を目指している▼教会のヒエラルキーの頂点はイエス・キリストである。イエス・キリストは神の特性と人間の特性とを完全に有する唯一のお方であり、この方こそが完全な意味で祭司、すなわち神と人との仲介者なのである。仲介者としてキリストは神でありながら、人間性を拒むことがなかったように、キリスト者たちも仲介者として、互いの特性を拒むことなく、それぞれが有機的な交わりのうちに三位一体の神秘に参与していく、これが本来のヒエラルキーの意味である▼ヒエラルキーという語に罪はない。むしろ誤った解釈こそが正されるべきである。（通）

Synod 2018　Youth, faith and vocational discernment　「若者」をテーマにしたシノドスに向けて

教会はいつも新しくなる ⑥

日頃感じていること、伝えたいこと

長崎北地区青年会
水主町小教区信徒　今田亜希

今、教会は主の復活を祝い、命の甦（よみがえ）りをたたえる日々を送っています。そこに希望をおいて祈る時、一青年として、深く心に思い浮かぶことがあります。現在長崎教区の中で活動している青年会は一握りです。そのような中で、何とかしたいと悩み、苦しんでいる私たちの現状をここで述べたいと思います。

愛が見えない教会

「青年会の存続について皆さんでもっと考えていただきたいです」と会議で発言すると、このような意見が返ってきました。

「自分が若かった頃はたくさん若者が教会に来ていて、いろいろ遊んだり奉仕したりして、活発だった」「神父様はお忙しいので青年の活動まで手が回らないから、自分たちでどうにかしなさい」「近頃の若い人は自分の意思がない。言われたことはするが自分からはしない」など、自分の青年時代のこと、神父様のこと、青年についての意見は出てきましたが、青年会の存続についてどうしていくべきなのかという解決策を出す方は誰もいませんでした。教会では「近くに困っている人がいるなら助けましょう」「隣人をあなた自身のように愛しなさい」と教わりました。しかし、今の教会では愛を感じられなくなってきたように思えます。青年会の存続の問題は若い人たちだけの問題で、皆さんの問題ではないのでしょうか。神父様方はどう考えていらっしゃるのでしょうか。

私は、青年会活動を通して多くの仲間に出会いました。そしてたくさんの神父様との出会いもありました。多くの神父様は、私たちの良い道しるべとなり、助けてくださいました。特にある神父様は、信仰の面から私たちの活動を意味のあるものに導いてくださいました。私たち北地区青年会の活動として2013年から「ミサこん」という交流イベントを行ってきました。婚活と神聖なミサを合わせることに一部の神父様方はよく思っていないようでした。しかしその神父様は、私たちがこのイベントに込めた「出会いを求める」と同時に「一緒に神様を囲んで食事をする」・「ミサに一緒に与る」という意味を理解し、私たちと一緒に考え、この「ミサこん」を作ってくださいました。内容も「ただ遊ぶ」のではなく、「神様を中心にして考え、意味のあるものにすることによって、信仰に触れることができる」と教えてくださいました。

一方、私は、ある神父様の言動に驚き、言葉を失いました。私たち信徒の模範となり、信仰の道を示してくださる神父様が、本心からと思いたくありませんが、その場にいない青年をバカにする発言をして笑っていました。このことがあってから、神父様のことが怖くなりました。愛に満ちた神父様が怖い存在になると、教会に自分の居場所を求め集う私たちは、足を運びづらくなってしまいます。教会に来ない人に問題があると言って片付けるのではなく、迎える教会内に問題がないかも考えてみてほしいのです。

寄り添う心

最近、世の中の流れなのか、みんな忙しくしているように感じます。教会内でも同じです。癒やしの場である教会が忙しい波にのみ込まれ、暗く濁っているように感じます。神父様や信徒の皆さんも忙しくされていて、教会から離れている人へ目を向ける時間もないようです。このような場で青年の発掘について訴えても無駄なことなのかもしれませんね。

数年前私は、カナダでプロテスタントの教会に何回か通う機会がありました。初めて訪れた時のことは、今でもよく憶えています。大きな教会ではありませんでしたが、多くの信者が集い聖堂はいっぱいになっていました。皆、活気にあふれ、賛美歌の歌声が心地よかったです。ミサ後、人々は聖堂にとどまり、グループに分かれ聖書の勉強が行われていました。勉強の後は同じ食卓を囲み簡単な食事をしていました。みんな日曜日の午前中は共に教会で過ごしていたのです。そして多くの若者が一緒に集っていたことも印象的でした。

今の私たちの教会はどうでしょう。ミサに行っても終わったらすぐに帰り、集まるのは会議の時だけ。みんなで集い、会話する時間もないようです。私たちの先祖が信仰という大きなお恵み（力）で教会に集まっていたように、その火を絶やさないでくださいと神父様は言われます。しかし、現代の教会では、その火が消えかけている人に手を差し伸べる手段を見いだすのはとても難しく感じます。

寄り添う人がいない

青年会の活動の中で小教区での典礼奉仕の活動があります。他の教会へお邪魔して典礼奉仕をさせていただいたこともありましたが、主に自分の教会の典礼奉仕をさせてもらっています。最近は活動する青年の数も減り、青年の参加をお願いする呼びかけを行っていますが、相変わらず少ないです。そのことをある神父様に相談したら、どういうわけか「やめたらいい」と言われました。この活動を続けるためにはどうしたらいいかの相談に、「やめたらいい」という答えが返ってきて、驚いてしまいました。一緒に悩み、良い方向へ導いてくださるはずの神父様の答えが、このような今までの頑張りを一から否定するものであったということが、とても残念で、悲しかったです。教会にとっては大した悩みではなかったのかもしれません。でも典礼奉仕活動をやめることで、青年と教会のつながりがなくなることがすごく残念だと思いました。そもそもこの活動は、身近な典礼奉仕を通して、小教区共同体の力に青年もなれたらいいなぁと思ったのが始まりでした。誰でも参加しやすい活動に、神父様や信徒の皆さんと一緒に青年会を盛り上げていけたらと日々思っていました。しかし私たちのそのような願いも届いていなかったようです。みんなで築いた青年会の活動でしたが、こういう発言によって、青年会は教会にとって必要なものではないのだと感じました。神父様の発言が、私たち信徒の心に深く残り、傷になっていくことに気づいてほしいのです。

教会から離れている人たちとの関わり

神父様の発言によって、教会への愛が揺らいでしまいそうになりました。確固たる信仰を持っていない私たちは、神父様の何気ない一言で信仰を感じ、そして失うのです。これは教会から離れている人たちも同様なのではないでしょうか。信仰を示し、召命へと導く神父様の発言によって教会に行けなくなった人もいるかもしれません。一度失った信頼を取り戻すのはとても難しいことです。しかし信頼を取り戻し、教会が癒やしの場になるためには神父様の刷新も必要だと思います。現代社会において、誘惑はたくさんあります。しかし教会に行かなくなることをどうか社会のせいにしないでください。生活が変わっても信仰は変わらないとおっしゃった神父様の言葉を信じたいのです。私たちにどうか示してください。

青年会の今後

イエス様の足元にいた弟子たちは、ほとんどが青年だったと思います。「物分かりが悪い者たち」とイエス様に嘆かれながらも時が来た時、その復活の証人となり、教会の中心となって福音を宣べ伝えていった弟子たち。今の教会の姿と重ね合わせると、あまりのギャップに愕然とします。今の長崎教区の青年会は、小教区によってはないところも多くあり、地区で集まってもせいぜい5～6人ほどです。「皆さん、このままでいいのですか？」と叫びたくなります。教会共同体の中で高齢者が増え、青年が希薄になる時、そう10年後、20年後の未来の教会はどのような姿になっているのでしょうか。確かに社会的にも青年の立場は厳しい状況にあり、教会に来る時間がないなど様々な要因があります。しかし、このような中であっても、青年会の存在の大切さに心を留め、理解と支えがあれば、青年会はあちらこちらで再び芽を吹くことができるのではないでしょうか。教会に若者がいなくなったと嘆くばかりではなく、どうしていくべきなのかを考え、行動してほしいのです。若者の信仰の火を絶やさないためにも…。

主の呼びかけの途上に

青年のための巡礼ウォーク in 外海・西海

ゴールデンウイーク連休前半の4月29日（日）から30日（月）にかけて、教区召命委員会主催「2018青年のための巡礼ウォーク in 外海・西海」が行われ、長崎中・北・佐世保各地区から6人の青年が参加した。

今回は、初日に中浦ジュリアン生誕の地から大島・間瀬教会までの8kmの徒歩巡礼と、2日目に神ノ浦から次兵衛岩まで3.5kmの登山巡礼を行い、福者トマス金鍔次兵衛神父が禁教令下の宣教の最中にわずかな休息をとった次兵衛岩（写真）で感謝のミサをささげた。

説教を行った山口竜太郎師（出津教会主任司祭）は、エマオへの途上での聖書の箇所を引用しながら自身の召命の体験を語り、「主の呼びかけの途上に私たちはいます。共にいてくださる主は、出会いや出来事を通して私たちを教え、導いてくださるのです」と参加した青年と分かち合った。

主催関係者は「今回は、特に太田尾教会主任の浅田照明神父様と太田尾小教区の信徒の皆様、次兵衛岩への案内をしてくださった出津教会の高橋さん、川原さんにご高配いただいた。感謝したい」と語っていた。

第2回高見杯CUP開催のお知らせ

6月17日（日）大司教館で青年ソフトバレー大会

昨年6月18日 第1回大会の様子

昨年6月、青年たち自身が企画し、初めて実施した「高見杯青年ソフトバレーボール大会」。高見三明大司教、司祭たちの協力のもと、全7地区から合わせて50人を超える参加者があった。

今回、長崎3地区、佐世保地区の青年の代表が中心となり各地区の現状や活動を報告する「青年とともに」という会議の中で、昨年に引き続き今年も同大会を開催することとなった。年々青年が減少している中、若者の交流・活動の場を少しでも広げようと、参加と協力を呼びかけている。

「同じ年代の仲間や神父様方、大司教様と交流してみませんか？　多くの方の参加をお待ちしております」（大会実行委員会）

6月17日（日）12時30分（12時受付）～15時、長崎大司教館体育館で開催。対象は18～40歳くらいで高校生不可、既婚者可。シューズと運動着を持参。参加費1000円。

申し込みは、6月3日（日）までに浦上教会へ（ファックス 095-844-6508）。

教区平和推進委員会主催

平和学習参加者募集のお知らせ

▪ 広島ピース・スタディー〈申込〆切 7月8日〉
- 日　程　8月5日（日）～8月6日（月）
- 訪問地　広島市
- 対　象　長崎県在住のカトリック信徒の中学生・高校生
- 参加費　5,000円

▪ 沖縄平和学習〈申込〆切 7月8日〉
- 日　程　8月17日（金）～8月20日（月）
- 訪問地　沖縄県那覇市、名護市、他
- 対　象　長崎県在住のカトリック信徒の高校生
- 参加費　30,000円
- その他　事前学習あり〔後日連絡〕

＊申込み　教会に配布された申込用紙を主任司祭に提出
＊問合せ　教区福音化推進部（担当　小圷（こあくつ））
TEL 095－842－4450

2018年度 行事予定

月日	行事	備考
5月 3日（木）	教区評議会総会	カトリックセンター
3日（木）	第141回クルシリヨ	立山修道院（5/6まで）
11日（金）	第57回朝祷会全国連合全国大会	カトリックセンター他（5/13まで）
13日（日）	井持浦ルルド祭	井持浦
15日（火）	教区司祭黙想会①	大司教館（5/18まで）
20日（日）	雲仙殉教祭	雲仙メモリアルホール
22日（火）	教区司祭黙想会②	立山修道院（5/25まで）
6月 6日（水）	教区結婚講座 夏コース開講	毎週水（7/4まで）
17日（日）	第2回髙見杯青年ソフトバレー大会	大司教館体育館
24日（日）	公開聖書講座	カトリックセンター
7月16日（月）	教区家庭委員会南地区講演会	カトリックセンター
22日（日）	旅の始まり150周年記念式典	浦上教会
8月 5日（日）	広島ピース・スタディー	8/6まで
8日（水）	原爆殉難者慰霊祭	爆心地公園
9日（木）	平和祈願祭（長崎）	浦上教会・平和公園
15日（水）	聖母平和祈願祭（佐世保）	アルカスSASEBO
17日（金）	沖縄平和学習	8/20まで
19日（日）	教区シノドスを受けて カテキスタのための研修会	カトリックセンター
26日（日）	教区家庭委員会北地区講演会	カトリックセンター
9月 2日（日）	大村殉教祭	シーハットおおむら
9日（日）	十字架山殉教祭	長崎・十字架山
16日（日）	福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭	焼罪史跡公園
23日（日）	聖トマス西と十五殉教者祭	中町教会
24日（月）	公開信仰養成講座	カトリックセンター
10月 3日（水）	教区結婚講座 秋コース開講	毎週水（10/31まで）
5日（金）	第142回クルシリヨ	田平教会（10/8まで）
7日（日）	島原・天草殉教福者記念ミサ	南島原・原城跡
8日（月）	公開典礼講座	カトリックセンター
20日（土）	日本カテキスタ会主催公開講座	大司教館（10/21まで）
23日（火）	司祭研修会	10/24まで
28日（日）	牢屋の窄殉教祭	久賀・牢屋の窄
11月 1日（木）	司教座聖堂献堂記念日	
4日（日）	教区主催追悼ミサ	滑石教会
11日（日）	黒瀬の辻殉教祭	生月・クルスの丘公園
12月 2日（日）	平戸ザビエル祭	平戸教会
1月22日（火）	WYDパナマ大会（本大会）	1/27まで
2月 3日（日）	日本二十六聖人殉教記念ミサ	西坂公園
5日（火）	日本二十六聖人殉教者記念日	
6日（水）	教区結婚講座 冬コース開講	毎週水（3/6まで）
10日（日）	教区家庭委員会南地区映画上映会	カトリックセンター
3月 3日（日）	教区青年黙想会	大司教館
17日（日）	日本の信徒発見の聖母記念ミサ	大浦天主堂
21日（木）	司祭助祭叙階式	浦上教会

信仰つなぐ「祈りは未来へ」

田平教会献堂100年記念

記念ミサ

5月13日（日）11時、田平教会（中田輝次主任司祭）は献堂100年を祝うミサと式典を同教会で行った。当日は強い雨の中、高見三明大司教をはじめ教区内外の田平教会出身司祭、修道会司祭、歴代の小教区主任司祭、平戸地区の小教区主任司祭、また大勢の田平教会出身奉献生活者がこの日を共に祝うため集まった。

ミサの前に、聖堂正面玄関脇の50周年記念碑を改装してつくられた100周年記念碑を大司教が除幕、祝別した。聖堂建設に苦労した人々を思い起こし、聖堂を守り続ける決意を新たにした。

ミサは小教区の信徒、県内外の出身信徒、奉献生活者、平戸地区の小教区信徒代表ら計400人余が祈りをささげた。髙見大司教は説教の中で、「主の昇天の祭日に献堂100周年を迎えました。『全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい』この使命は弟子たち、そして私たちも受けました。今日、100年の価値を新たにまとった聖堂をいただいたのですから、これからも信仰を分かち合い、祈りを絶やさず、ここを宣教の拠点としてほしい」と励ました。

お祝い会

午後は信徒会館に移動してお祝い会をし、節目の日を皆で喜び合った。参加者の一人は「雨となり、運動会のはずだった小学生もミサに参加できた。田平教会のすべての人に感謝したい」と語った。また準備にあたった関係者は「この日のために唱えてきた『献堂百周年の祈り』と記念の歌『祈りは未来へ』を胸に、次の世代に信仰を確実につなぎたい」と話していた。

永井隆 生誕110年にあたって

長崎如己の会 副理事長　永井 徳三郎

早いもので、多くの方々のご支援・ご協力のもと、祖父の生誕100年記念行事を盛大に開催してから10年が過ぎ、今年再び節目の年を迎えました。これを記念し、100年の時ほどの規模には至りませんが、年間を通じていくつか行事を開催することとなりました。

5月1日 追悼祭

2月3日、110歳の誕生日には、長崎市内の小学生から大学生までが一堂に会し、平和に寄せる思いや日頃の取り組み・活動などを発表する「〝平和を〟ここから未来へ」を長崎原爆資料館ホールにて開催しました（250人参加）。また、5月1日の命日には、隆と緑の墓前にて、聖母の騎士学園の﨑濵宏美神父様司式、東長崎教会聖歌隊の皆さんのご協力のもと、ささやかな追悼祭を開催しました。没後67年の歳月を過ぎてなお、隆の遺徳を偲び、平日ではありましたが多くの方にご参列いただき、遺族として感謝の念に堪えません。

隆の悲願であった〝平和を〟誰もが実感できる時代が訪れるよう、これからも「如己愛人」の精神とともに努めていきたいものです。

なお、今後も記念行事として8月に特別展、時期未定ですが音楽会なども予定しています。

朝祷会全国大会

第57回朝祷会全国連合全国大会が5月11日（金）～13日（日）、「受け継いだ信仰――その豊かな恵みを共に」をテーマに長崎で開催され、全国から宗派を超えて参加した約180人が中町教会（11日）とカトリックセンター（12・13日）に集まった。

参加者は、礼拝や記念講演、歓迎晩餐会、テゼ賛美の集いによる夕祷などのプログラムを通して、平和を願い、一致に向けて心を新たにした。

記念講演の講師は、「受け継いだ信仰」と題して、前長崎キリスト教協議会委員長の藤井清邦牧師と、永井隆記念館館長の永井徳三郎氏が務めた。

〝これからも成長を――〟

小神学院で堅信式

4月22日（日）、長崎カトリック神学院で堅信式が行われた。今年、神学院で堅信の秘跡を受けたのは4人の中学2年生と3人の中学3年生で、当日は家族や関係者たちを含め、30人余が神学院に集まり、受堅者たちのために祈りをささげた。

司式した髙見三明大司教は「個人的な祈りの習慣を身につけてキリストとの親しさを深め、聖書を読んでその内容を学び、学んだことを友人たちに証しできるようになってほしい」と受堅者たちにエールを送った。式の終わりには、受堅者を代表して、中学3年の鈴木涼太郎神学生が「支えてくださっている方々への感謝の気持ちを忘れず、これからも成長していきたい」と決意を述べた。

ここ数年、堅信を受ける神学生は、浦上教会での堅信式に参加していたが、これからは神学院での堅信式を2年に一度行う予定にしている。

西町教会の堅信式

西町教会では4月15日（日）9時からのミサで、中学1年生16人と大人5人の計21人が堅信の恵みにあずかった。

神学生・志願生の紹介①

7月1日（日）9時から植松教会で召命祈願ミサが行われます。会場に来ることができない方も、心にとめていただき共にお祈りください。

神学生・志願生の写真と共に、氏名、出身教会、共同体が大切にしていること（＊）を掲載します。

長崎カトリック神学院

●高1　岩永魁世（神ノ島）、鶴﨑大鳳（黒島）●中学3年　鈴木涼太郎（福岡・今村）、谷口裕翔（桐）、森本想（浦上）●中2　浅田大輔（黒島）、内野光太朗（大崎）、島田彪吾（相浦）、溝口幸聖（大崎）●中1　岩永剣世（神ノ島）、山下飛翼（黒崎）

＊単に司祭になることを目指すのではなく、司祭として生きることを目指し、そのために必要なことを身につける。

聖ルドヴィコ神学院

●高校3年　池田健吾（植松）、岩橋樹広（福岡・今村）、田中逸樹（深堀）、横山智（福岡・久留米）

＊コミュニケーション、共同体での生活と時間を大切にする。「ミサや祈りの中で霊的な部分を伸ばしていきたいです」「教会に行く時や外出する時は、周りの人から見て印象がよくなるよう頑張っています」〔神学生の言葉〕

聖コルベ志願院

●中2　高橋結人（名古屋・平針）、山田慶次（西町）●高3　空閑竜乗（福岡・笹丘）●中3　ホアン・ドゥ・ミン・ディエン（大阪・仁豊野）

＊「ゴミサの準備、香部屋に関する仕事に対しては、特別に真心を込めて時間をかけてするように指導しています。典礼を通して神様に出会い、またその典礼を通して神様に導く人になるよう、成長してほしいと願っています。また、私たち修道会が兄弟としての交わりを大切に、共同体での生活がメインになるので、少しでもフランシスカン霊性に触れるように、修道会の聖人、歴史を学ぶ時間を設け、そして日本での先輩会員たちの活躍にも日頃から触れることができるように心がけています」

お告げのマリア修道会

●大学2年　鍋内佳奈（浦頭）●高3　岩永咲来（神ノ島）、宇野珠菜（鯛之浦）、馬場みちえ（大野）●高1　久家優菜（相浦）、小田﨑遥（稲佐）●中3　中村静流（大崎）●中2　中村香穂（大崎）●中1　竹内琴音（浜串）

＊気持ちのいいあいさつ・聖体訪問・毎朝の掃除

純心聖母会

●大3　里脇磨莉菜（植松）●大2　風間千璃（さいたま・北浦和）●高2　井手みのり（西町）●中2　永田ゆり（三浦町）

＊「私たち共同体は今年度2つの場所でそれぞれのスタートをきりました。場所は違ってもいつも『ここころは一つ』です。イエス様に向かっています」

教会の母聖マリアと共に

井持浦教会でルルド祭

5月13日（日）13時、井持浦教会（中村 満主任司祭）でルルド祭が行われた。今年のテーマは「教会の母聖マリアと共に歩もう」。この日は雨のためミサ前の聖母行列を中止し、聖堂でロザリオの祈りをささげ聖母像への献香後、ミサへと続いた。

説教師を務めた小瀬良明師（浦頭教会）は、教会の母であり平和を求めておられる聖母への崇敬は、全世界のカトリック信者にとって心のよりどころであり慰めの源であると触れ、「私たちは自分の生涯を振り返ってみる時、神様からの恵みに気づくことができるでしょう。これらの出来事は神様からの贈り物。聖母を通して与えられる恵みを思い出し、感謝し、喜びの信仰生活を取り戻してまいりましょう」と語った。また、周りの人に寄り添う心を持つことができるよう、母の日にあたり私たち一人一人の母を思うとともに、聖母への祈りを呼び掛けた。

当日は五島市内の運動会の日程と重なり、また雨天でもあったが、各地から信徒・修道者ら約140人が参加。毎年、福江から井持浦までを徒歩巡礼し参加しているお告げのマリア修道会のシスターも、今年は雨の中、3人が歩いた。

人

二十六聖人の道を徒歩巡礼
スイスから来日した
ロルフ・ツムトゥルム神父

2017年に司祭叙階25周年を迎え、同年9月から1年間、サバティカル休暇で来日。目的は諸宗教対話の体験を深めることと、巡礼。スイス・シオンの教区司祭で、スイス司教協議会のエキュメニズム・諸宗教部門を担当。巡礼は、これまで夏休みを利用してヨーロッパをはじめ東南アジアや南アメリカを訪ねた。10年前の来日時、二十六聖人記念館を見学し、二十六聖人とカクレキリシタンの話に感銘を受ける。再び日本に来たいとの思いが、今回実現した形だ。

9月～12月、京都のNCC宗教研究所でカトリック、プロテスタントの人々と一緒に講義を聴き、寺や神社を訪問。新宗教に関しても学んだ。今年2月からは京都を出発して〝二十六聖人の道〟を辿る。

4月下旬、長崎に到着。今回の巡礼はアシジやサンティアゴなど、過去に経験した巡礼の延長線上にあるものという。「自分の霊性はある意味、足で歩く霊性」だと語る。

巡礼中は必要な時々に助けを受けた。「漢字が読めず、毎日調べることがあって、決して楽ではなかった」と振り返る。それでも同僚の司祭や小教区の信徒、友人から「体験を分かち合ってほしい」と求められ立ち上げたブログを日々更新。写真と共にフランス語と英語の説明文を掲載する。「この2つの言語だと（多言語の）スイスでもほとんどの人が理解できる。それに、日本の皆さんの中にも英語が分かる方が多いので。興味を持って見てくれる人の存在に励まされ、後押しされる」

今回の巡礼で変わったのは時間に対する自身の在り方。「自分の足で苦労しながら歩くと、時間はかかるけれど、得る体験が違ってくる。天候も、晴れか雨かで大きく違う。出発時は2月半ばで寒かったけれど、やがて桜の開花を迎え、4月には夏のような暑さを感じた。何を食べるかどこで寝るか、人生における、毎日の生活における一番基本的で大切なことを考えさせられる環境にあり、目を開かれる体験だった」また、「自分一人でこのような巡礼はできない。巡礼前から現在も多くの方の支えをいただいている。二十六聖人の道を皆と一緒に歩くことも、声を掛けてくれた人の協力でできたこと」そして、一人ではなく常に共同体の中でミサをささげることができたのも恵みだった。

今は四国でのお遍路を計画中。広島や長崎での平和の祈り、高野山やカクレキリシタン関連の場所も訪ねたいという。いつも意識する言葉は、スイスの保護の聖人・フルーの聖ニコラスの祈り。「私の主、私の神よ、…私を自分自身への執着から解放してください、あなたに私のすべてをささげることができるように」

自身の性格を「少し短気」とだけ評するが、巡礼に臨む姿勢と周りの人々への感謝の思いを語る姿は、静かでまっすぐで、温かい。53歳。

巡礼ブログ　https://japanpilgerreiserolfzumthurm.wordpress.com/

命懸けで信仰を証しして

第35回 雲仙殉教祭

5月20日（日）雲仙殉教祭が雲仙メモリアルホールで開催され、1300人余が参加した。ミサに先立ち、諫早教会の青年・高校生たちによる「諫早のキリシタンの歴史の紹介」が映像を通して行われた。

ミサの初めに、雲仙地獄の温泉水が大司教により祝福され会衆に灌水された。参列者は灌水を受けながら殉教者の熱い信仰に思いを馳せた。

説教師の髙見大司教は「今日は聖霊降臨の祭日。殉教者たちが耐え難い拷問を受けながらも、迫害者に寛容で穏やかな態度で信仰を証しすることができたのは、聖霊の働きがあったから。お金や物質的豊かさなどに信仰の感覚が鈍らされ活力を失いかけている今の世の中で、殉教者たちは『周囲の人に、命懸けで信仰を証ししてください』と呼びかけている」と語った。

ミサ後、殉教碑への巡礼が行われた。

みことばにふれて 149

山口 雅稔 神父
（コンベンツアル聖フランシスコ修道会、本河内教会）

今年から聖霊降臨の主日後の月曜日に、「教会の母聖マリア」の記念日が典礼において祝われるようになりました。「母は十字架のもとに立ち（ヨハネ19・25参照）、わが子の愛のあかしを受け入れ、永遠のいのちへと再生する子としてすべての人を最愛の弟子の名のもとに迎えた。こうして母は、キリストが十字架上で霊をゆだねることによって生まれた教会の優しい母となった」（典礼秘跡省『教令―一般ローマ暦における「教会の母聖マリア」の祭儀について―』抜粋）。

十字架にはりつけにされたイエスは、母マリアにみことばを託されます。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」（ヨハネ19・26）。イエスが絶命する寸前に母マリアに託されたみことば、それが、「御覧なさい。あなたの子です」。聖母は、イエスのみことばに従って弟子であるわたしたちを見守り続けてくださいます。また、イエスは悶絶の絶頂にあって愛する弟子を見て言われました。「見なさい。あなたの母です」（ヨハネ19・27）。これは、この弟子だけでなく、すべての弟子たち、すなわち洗礼を受けたわたしたちに向けられたイエスの十字架上での遺言です。このみことばに従ってわたしたちはマリアを母として見るのです。イエスのみことばに従って聖母とわたしたちはお互いに見つめ合い、マリアは教会の母として、わたしたちを永遠の命へと導いてくださいます。

「サンタマリアの御像はどこ？」と浦上の潜伏キリシタンたちは、聖母マリアを求め、聖母子像を見て喜び感動しました。聖母もまた、十字架上の息子と弟子を見守っていたように、長い潜伏状況におかれている信者たちをいつくしみの目で見守り続けていたのではないでしょうか。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産登録の勧告を受け、たくさんの方々が教会に訪れるようになるでしょう。その時、十字架のイエスを見つめる人が、「あなたの母です」のみことばどおりマリアを母として受け入れ、マリアを見つめる人が、イエスの十字架による贖いのわざを悟り、主の死と復活の神秘にあずかる洗礼の恵みへと導かれますよう切に願います。

新刊良書

★そのとき風がふいた―ド・ロ神父となかまたちの冒険

漫画＝ニューロック木綿子
監修＝中濱敬司（長崎教区司祭）

このほど週刊「こじか」の連載漫画が単行本化され、ド・ロ神父来日150年記念日の6月7日に刊行。プティジャン神父が大浦天主堂で潜伏キリシタンと歴史的出会いを果たしたのを受け、フランスから長崎にやってきた宣教師マルク・マリー・ド・ロ。医療・建築・土木・農業の広い知識と技術で、人々に生きる糧と希望をもたらしたド・ロ神父の活躍と、共に献身的に働いた人々の歩みを漫画でたどる。

オリエンス宗教研究所。団体割引あり（7月末までに50冊以上のご注文で10％引き）。A5判。税別1300円。

オリエンス宗教研究所
〒156-0043　東京都世田谷区松原2-28-5
☎03-3322-7601　Fax 03-3325-5322
https://www.oriens.or.jp/

ぶどう園

▼公開聖書講座『「あなたの敵を愛しなさい」…山上の説教のこころ』　6月24日(日)13時～16時、カトリックセンター。講師・古里慶史郎師（フランシスコ会）。参加費500円。申込先（6月17日〆切）・教区生涯養成委員会 Fax 095-841-7732

▼一日の祈りのつどい　6月28日(木)佐々教会、7月12日(木)中町教会。9時15分～16時。参加費500円。聖書、筆記用具、昼食を持参。みつあみの会主催。各教会に配布の案内を確認の上、申込み。

▼長崎歴史文化博物館特集展示「潜伏キリシタンと明治維新」　6月30日(土)～9月2日(日)。本紙『カトリック教報』6月号を提示すると半額料金（300円）で入館可。

▼講演会「共に生きる学び―人のいのちの素晴らしさの再考察」　7月16日(月)13時、カトリックセンター。講師・松本信愛師（大阪教区）。教区家庭委員会南地区主催。

アルフォンソ・マリー 野嵜博子修道女

（至聖贖罪主女子修道会）

4月24日、長崎市の田上病院で逝去。88歳。東京都出身。

1957年鎌倉修道院に入会。数年後、長崎修道院に転籍。60年9月24日、有期誓願宣立、66年10月7日終生誓願宣立。外務修道女として愛宕教会や長崎教区で働いた後、自身が心の中でずっと持ち続けていた、小さき人々のために働きたいという希望を実現するため、1979年に視覚障がい者のための「声の奉仕会・マリア文庫」を、たくさんの協力者の方々と共に創立し働いた。虚弱な体質だったが、その苦しみを捧げて58年間の修道生活を全うした。

葬儀・告別式は4月26日、レデンプトリスチン長崎修道院聖堂で行われた。

アルナルド 谷村達郎神父

（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）

4月30日、諫早市の聖フランシスコ園で逝去。76歳。滋賀県大津市生まれ。1963年入会。65年有期誓願宣立、68年終生誓願宣立。73年11月3日、東京カテドラル関口教会で司祭叙階。その後、関町修学院で院長代行、仁川学院中学・高等学校教諭を務め、ブラジルへ赴任。86年聖母の騎士園（小長井）、89年聖母の騎士社、92年から本部修道院で聖母の騎士社東京支社長、93年カトリック中央協議会企画推進部勤務。94年から鹿児島・古仁屋教会主任、古田町教会助任・主任、愛知・春日井教会主任を歴任。2009年イタリア。13年長崎・聖コルベ志願院院長、17年春日井教会助任。湯江修道院での療養を経て入院生活後、聖フランシスコ園入所。親しみのある素朴な詩やイラストを多くの人に送り、励ました。いつも朗らかで、笑顔の絶えない司祭だった。

葬儀・告別式は5月4日、日本管区長の竹内昭彦師の司式により本河内教会で行われた。

感謝

―香典返し―

長崎大司教区
●レデンプトリスチン長崎修道院様
故スール・アルフォンソ・マリー 野嵜博子様

長崎カトリック神学院
●上村 栄様（浦上）
故マリア上村ハルエ様
●深堀恒子様（浦上）
故マリア深堀ヒサ子様
●岩永千恵子様（浦上）
故チモテオ岩永俊明様
故パウロ岩永司朗様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

7月号は休刊いたします